

数字で知る AMDD

30年

医療機器・IVDの発展とともに歩む

平均事業年数30年。
AMDDのメンバー企業の多くは
日本の医療の発展と共に歩んできました。



いつもの診断と治療を支える

AMDDメンバーが提供する医療機器は、
患者さんの健康を守る医療シーンの
7割*に貢献しています。



7割

*医療機器販売額ベースからの推計

145,000名

日本国内で堅実な雇用を創出

AMDDメンバー企業に勤務する正社員13万7281名、
契約／派遣社員8,140名(2020年現在)。
およそ14万5000名の雇用を生み出しています。



2020年実施の会員企業対象アンケート調査をもとに作成

活動内容

日本政府や学会、関係業界団体と協力し、
先進的な医療技術の迅速かつ適切な医療現場への導入、
イノベーションの評価と医療費の適切な配分を実現するため、
米国政府および米国に本部のある先進医療技術工業会(AdvaMed)との連携を保ちながら、
医療機器規制、医療保険償還価格および制度に対する提言に関し、
加盟企業を代表して厚生労働省をはじめとした行政との対話窓口の役割を担います。

AMDD

日本を、もっと健やかに。



AMDDは、主に米国に本社がある医療機器・体外診断用医薬品(IVD)メーカーの日本法人
およそ70社で構成された団体です。
日本の医療現場と患者さんのニーズに応じて、最新の治療・診断技術と情報をお届けしています。





血液検査で心臓の健康状態を知る

循環器バイオマーカー

血液検査には心臓の検査項目があります。心臓の負担を測るBNPやNT-proBNP、心筋の傷害を診る心筋トロポニンが代表的な項目で、画像検査の結果とあわせて心不全や心筋梗塞、狭心症の診断に利用されています。脳梗塞の血液検査項目の開発も進み、一度の血液検査で脳と心臓の重大な病気をチェックできる時代が期待されています。



いつでも、どこでも、画像検査を

ポケットエコー

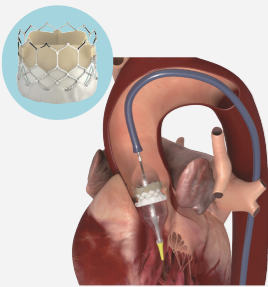
重たい精密機械の代名詞である画像診断装置の小型化が進んでいます。たとえば、おなじみのエコー検査でも小回りがきくモバイル機器が活躍中。ポケットサイズのエコーは患者さんの負担が少ないうえに汎用性が高く、在宅医療や介護施設での診療から、臓器がん、下肢静脈瘤のスクリーニングなど高度な診断まで幅広く利用されています。



脳血管につまった血栓を“お掃除”

脳梗塞 血栓回収ステント

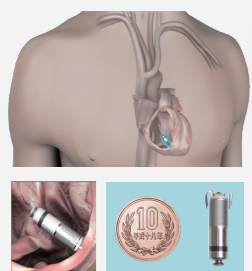
急性脳梗塞の標準治療である血栓溶解療法は適応が限られ、脳血流の再開率は3~4割にとどまります。一方、今世紀に登場した血栓回収ステントによる血管内治療は、デリバリワイヤに装着した特殊なデバイスで脳血管につまった血栓を絡め取って体外へ除去し、血流を再開する方法です。適応症例が広がり、再開通率が8~9割と劇的に向上したことで後遺症の軽減が期待されています。



開胸手術も、心臓を止める必要もない

経カテーテル大動脈弁治療TAVI(タビ)

加齢などに伴い心臓内の大動脈弁に障害が起き、正常に機能しなくなる大動脈弁狭窄症。悪くなった弁を人工弁に換えるためには胸を開く手術が必要でしたが、体力がない高齢者や持病がある方は受けられないこともありました。しかし足の付け根の血管などから挿入したカテーテルを使って人工弁を患者さんの心臓まで運び、留置する低侵襲のTAVIが登場したことで、根治を諦めていた方にも治療の選択肢が広がりました。



生活の質を追求したペースメーカー

リードレスペースメーカー

足の付け根などから挿入したカテーテルを介して、本体を直接、心臓の右心室内に留置する超小型のペースメーカーです。外科手術で本体を皮下に埋め込みリード線を心臓内に入れる必要がなく、静脈の閉塞や感染症などの合併症の軽減が期待できます。皮下ポケットの膨らみや手術跡を意識せずに自分らしい生活を楽しめる点も評価されています。



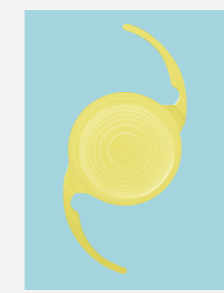
いつもの診療から
最先端のイノベーションまで。
AMDDメンバーの
治療・診断技術は、
様々な医療シーンを支えています。



グルコースモニタリングも“かざす”時代

グルコースモニタ

1型、2型糖尿病の血糖管理には血糖値の把握が欠かせません。これまでは患者さんが自ら採血し、手作業で血糖値を測っていましたが、近年、超小型の血糖(グルコース)センサを予め上腕部に貼り付け、端末をかざすとグルコース濃度が表示される連続測定デバイスが登場。患者さんの心理的な負担も軽くなりそうです。



先進技術で大切な視機能を守る

眼内レンズ・緑内障インプラント

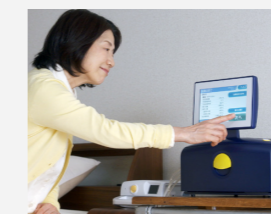
眼科領域は先進的な医療機器の宝庫です。白濁した水晶体の代わりに挿入できる遠近両用の「多焦点眼内レンズ」が、そして点眼治療で改善しない難治性の緑内障には、眼圧を上げる房水の“排水溝”の役割を果たす「緑内障インプラント」など視機能を維持し、中途失明を防ぐ高度な技術が活用されています。



耐久性と自然な動きでQOLが向上

人工膝関節

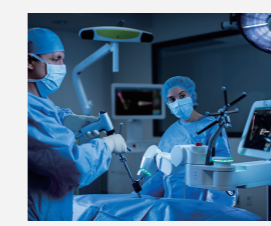
変形性膝関節症は「年のせいだから」と諦める方が多く、気がつくとも歩行困難となり要介護状態というケースが少なくありません。すり減った膝関節を適切な時期に人工関節に換えることは介護リスクの軽減につながる大切な治療です。最新の人工膝関節は、耐久性と「曲げる」「回す」など関節の自然な動きを無理なく両立し、健康寿命の延長と生活の質の改善に貢献しています。



寝ている間に自宅で透析

遠隔モニタリング付き自動腹膜透析

腹膜透析は自分の腹膜を利用して余分な水分や老廃物をろ過する療法で、心臓の負担が少なく、残った腎機能の保護が期待できます。近年、医療者の遠隔操作で透析中のトラブルや設定変更に対応できるモニタリング機能がついた全自動腹膜透析システムが登場。毎晩、医療者に見守られながら、眠っている間に透析が完了、透析のための通院が難しい現役世代の福音になりそうです。



整形外科でも手術ロボが活躍

手術支援ロボット

ロボット手術の活躍の場が、がんの摘出術から整形外科領域へ広がっています。人工関節置換術の手術ロボットに続き脊柱固定術でも手術ロボットが開発されています。術前計画のデータをもとに、ロボットアームが最適な位置と角度でのインプラント設置を実現。精密さが要求される整形外科手術で個人の経験や技術によらない正確性と低侵襲術の両立、難易度の高い術式への挑戦が始まっています。